# 出　張　報　告　書

令和　元年　11月　11日

会派名　民主市民ネット

会長　山田庫司郎　様

出張者氏名 山田庫司郎 平賀貴幸

金兵智則　川原田英世

下記のとおり出張したので報告します。

記

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 出張期間 | 令和　元年　10月　28日（月）～ 令和　元年　10月　30日（水）　〔 3 日間〕 | | | | | | |
| 出張概要 | ① | 月日 | 10月28日 | 市町村名 | 八戸市 | 会場 | hacchi、ﾌﾞｯｸｾﾝﾀｰ |
| | | 目的 | 先進地視察 | | | | |
| | | テーマ | 八戸ﾎﾟｰﾀﾙﾐｭｰｼﾞｱﾑ、八戸ﾌﾞｯｸｾﾝﾀｰについて（中心市街地活性化策） | | | | |
| | ② | 月日 | 10月29日 | 市町村名 | 紫波町 | 会場 | ｵｶﾞｰﾙﾍﾞｰｽ |
| | | 目的 | 先進地視察 | | | | |
| | | テーマ | 補助金に頼らない公民連携による地域活性化について | | | | |
| | ③ | 月日 | | 市町村名 | | 会場 | |
| | | 目的 | | | | | |
| | | テーマ | | | | | |
| | ④ | 月日 | | 市町村名 | | 会場 | |
| | | 目的 | | | | | |
| | | テーマ | | | | | |
| 所見 | 別紙のとおり | | | | | | |
| 備考 | | | | | | | |

※所見については、別紙（任意様式）で作成して下さい。

# 出　張　所　見

青森県八戸市

## 八戸ポータルミュージアム「はっち」について

八戸市は青森県第２の都市であり、青森県太平洋地域の中心都市として、漁業を中心に栄えてきました。しかし、近年は人口流出が止まらず、少子高齢化の流れもあり、中心市街地の人の流れの減少は顕著になっております。また、郊外に大規模店が増えてきており、中心市街地の商店は減少が続いていることから、地域経済の悪化は悪循環が続く状況でありました。

その状況を打開するために、八戸市ではＨ２０年に「八戸市中心市街地活性化基本計画」を策定し八戸ポータルミュージアム「はっち」や市営住宅整備事業などの４７事業を進めていくことになりました。

「はっち」の目的は、「賑わいの創出」「観光の振興」「文化の振興」にあり、そこから新たな交流と創造の拠点を目指しています。ポータルミュージアムというのは、まちの玄関口となる博物館ちう意味で、地域の情報の発信源となる八戸にいったら必ず寄ってみたい場所。つまり、「はっち」は観光客などには地域の博物館、情報館的な役割を、市民には市民の交流の場であり、まちの新たな魅力を知ることが出来る場所です。

これらのことから、中心市街地を活性化させて八戸市全体の活性化を進めていくということです。

「はっち」の機能と事業についてですが、何度も訪れたくなる複合施設として、「憩いの場」「子育ての場」「情報を得る場」などの設置、地域の物産館を配置、さまざまな事業への貸館事業や、ものづくりなどの自主事業の展開です。

とくに自主事業には力を入れており、さまざまな人の関りをつくり、地域の活性化に寄与しているとのことでした。

網走市では中心市街地の活性化へと取り組みを実施しているが、なかなか成果に繋げていくことが難しい状況にあります。こういった状況のなかで、新たな施設の開設から事業を展開し、観光客と市民が一体となって賑わいを作り出す「はっち」のような取り組みを大いに参考にして進めていかなくてはならないと考えさせられる、大変貴重な視察となりました。

# 出　張　所　見

青森県八戸市

## 八戸ブックセンターについて

八戸ブックセンターは全国でも珍しい公設公営の本屋さんであり、「本のまち八戸」を目指す取り組みの一環です。八戸市ではＨ２０年に「八戸市中心市街地活性化基本計画」を策定し、「はっち」やブックセンター、美術館や「マチニワ」というバス停留所と隣接したガラス張りの屋内交流施設を設置して中心市街地の施設が連携して回遊を図る計画を実施しています。

この八戸ブックセンターは、カフェが中心に設置されており、お洒落な空気の中、本の立ち読みができる仕組みになっており、販売されている本も、通常の本屋さんにはないものが多く、一冊一冊に丁寧に説明がされています。

このブックセンターには「本のまち八戸」として３つの方針があり、方針の１つは読む人を増やすこと。その事業としては読書会や飲み物を飲みながら本の魅力を語り合う会、テーマを設定した本の陳列を行い、他の本への興味を誘う取り組みを実施しています。とくに、テーマごとの陳列はさまざまな仕組みがみられ、非常に興味をひくものとなっておりました。方針の２つめは、書く人を増やすことです。出版ワークショップの開催や書くための部屋を設置しています。方針の３つめは本で「まち」を盛り上げることです。ブックセンター内にキャラリー展示がされており室内全面を使ったアートが楽しめます。そして地域を題材にした作家をパワープッシュ作家として作家によるトークイベントの開催、ブックフェスの開催、市内書店と連携、教育機関との連携などが図られています。

こういった各種の取り組みから八戸市では本の消費量が他市よりも多く、市民の読書習慣も高まってとのことです。

ブックスタート事業など、網走市とも共通する政策もありましたが、公設公営のお洒落な本屋さんという取り組みは八戸ならではのものであり、地域の人々の自慢にもなっているようです。

こういった特出的な取り組みは、まちの魅力を高め、地域の愛着度を高めることにもつながっていくことを実感しました。

網走市でもアイデアを絞り、他の町にはないオンリーワンを創ることから交流人口の拡大を図ることはできないか、検討していく必要があると考えます。

# 出　張　所　見

岩手県紫波町

## オガールプロジェクトについて

岩手県紫波町にて、PPPによる官民連携の新たなまちづくりプロジェクトとしてＨ２１年から始まったオガールを視察しました。

このオガールとは、紫波の方言である「おがる」(成長)とフランス語で駅を意味する「GARE」(ガール)を掛け合わせた造語であり、駅前の新たな造成地の成長に願いを込めてスタートしました。

新たな造成地とは、Ｈ１０年に開業した紫波中央駅の裏側に位置しており、長く農地として使用されてきた土地でありましたが、Ｈ１１年からスポーツ施設や公園などの整備計画が始まりましたが、実質公債費比率の上昇、基金減などの理由から事実上の計画凍結となり塩漬けにされていた土地でした。そういった中で市街地が老朽化して都市部への流出から空洞化が発生しており、新たな魅力的な市街を形成していく必要があるとして、駅の改修とともに駅裏地域のまちづくり計画「紫波町公民連携計画」がH21年に策定され、町や金融機関、農協・畜産流通業・テレビ岩手などが出資する「オガール紫波株式会社」が設立されました。

この会社は、オガールプロジェクトの推進としてオガールタウンの不動産開発、オガールベースやオガールプラザなどの官民複合施設を建築して管理・運営、産直「紫波マルシェ」の管理運営(売り上げの９５％を占める)、レストランの運営を行っており、バイオマスのエネルギーステーションやオガール保育園など、他の法人とも連携してプロジェクトを進めてきました。また役場庁舎もオガール紫波株式会社が建てたもので、不動産として紫波町に貸し出しており、管理委託収入を得ることで建設費を株所有の金融機関の借り入れから返済しています。

産直を主としたスーパー、居酒屋やレストラン、雑貨やアウトドアショップ、図書館やホテルなどなど、コンパクトなオガールエリアには一つのスマートシティが形成されており、電線なども地下に埋められていることから電柱もなく、緑の中に未来的なまちが形成されています。これには、さまざまな民間企業の有識者や町民からの意見を聞きながら、デザイン会議を重ねて形成していったプロジェクトの精密さがありました。

このプロジェクトはPPPの成功例として、大変参考になりました。この成功の最大の理由は、町長はじめ町の有志が早期からPPPに着目し研究をはじめ、幅広い企業がそれに理解を示して同調して出資者となり、官だけでは到底できない民間の仕組みを活用できたことにあります。PPPは網走の今後にも活用できますし、まだまだ研究が必要になりますが、大変参考になる視察となりました。